

【海外留学レポート】

印パ古典舞踊「カタック」に魅せられて

- カラーシュラム芸術学院での4年間（インド、デリー） -

Enchanted by the South Asian Classical Dance, *Kathak*: A Four-year
Dance Training with Kalashram, Delhi

カラーシュラム芸術学院卒 石井 由美子

ISHII Yumiko

(Graduate student of Kalashram, New Delhi)

キーワード：インド、舞踊

舞踊留学に至るまで

私は、学生時代に印パ（インドとパキスタン）の古典舞踊カタックに出会った。印パで多くの話者人口を誇るウルドゥー語を、大学で専攻していたことが舞踊に出会ったきっかけだ。優美で繊細でありながら力強く大胆な舞踊と、その複雑なリズムの虜になった。大学4回生の2007～2008年、語学の研鑽のためインド政府文化評議会(ICCR)の奨学生として1年間デリー大学で勉強する傍らカタックを嗜んだが、あまりにも支離滅裂な舞踊の教授法に四苦八苦し、舞踊の全体像が掴めぬまま留学期間終了となった。大学卒業・就職後もカタックという舞踊の魔法が解けず、就職後わずか2年ほどで退職。南アジアとの歴史的な繋がりが深く、蔵書や環境も充実したロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)で、舞踊に関わる古典音楽の研究の道に進んだ。修士課程を終え、理論的にカタックという舞踊と音楽やその輪郭がぼんやりと見えてきた2014年、1度目の留学から約6年間の月日を経て、舞踊を集中的に習得する目的で再度渡印した。

留学事始め

ビザ

ビザの発行手続きがスムーズにいかないのが在日本インド大使館の常ながら、私の舞踊留学ビザは申請後1週間程度で発行された。しかし、デリーでは到着直後から外国人登録やビザの延長など煩雑な手続きが、各国からやってくる留学生を待ち構えている。昨今、政府関連機関の諸手続きのオンラ

イン化やキャッシュレスが急速に進んでいるものの、カースト制度の残る分業社会では全体的な仕事のペースは遅く、窓口のスタッフの対応にはサービス精神の欠片もない。1度の訪問では必要な書類の種類を全て教えてもらえず、何度も足を運ばざるを得ない。手続きの過程で、一旦提出した申請書類が行方不明になる、列に並んでも順番通りに対応してもらえない、窓口の担当者によって判断が異なる、途中まで進んだ手続きが振り出しに戻る…といったことは日常茶飯事だ。

また、近年、留学生の受入れに対するインド政府の方針が厳しくなりつつあり、ICCR奨学金などインド政府を通さずに、自力で私立に長期間留学するのは難しくなっている。自力で留学手続きを行うとしても、国立大学などの大きな教育機関でなければ長期間のビザを与えられる可能性はかなり低くなってきているようだ。例えば、留学予定のコースが3年や5年のものであっても、1年単位でビザの更新を行わなくてはならないというケースをよく耳にする。さらには、自国の大使館でビザを取得してデリーの地に降り立ったが、外国人登録所から滞在許可を得られず困惑する留学生の姿も目にした。

私の留学したカラーシュラム芸術学院は、完全に私立で政府の留学生受入認可リストに登録されていないため、私は1年間のビザを3回更新することになった。毎年ビザ更新のルールが微妙に変更されるので、その度に奔走させられ、留学3年目からはビザの延長すら危うくなったが、物わかりのよさそうな担当官とインドならではの曖昧なルールが功を奏して、何とか卒業までビザを延長してもらうことができた。こればかりはまさにインド人でさえも予測不能な社会の掟で、この国の短所であり長所でもあると言える。

家探し

デリーは地域によって、住む人の階層がほぼ決まっている。南デリーには富裕層の住む地域が多く、家族向けの大き目の物件が多い。外国人女子の一人暮らしで安全性を求めると、東京のワンルーム・マンションと同じくらいの家賃を支払って少し大きめの家に住まざるを得ないが、舞踊留学生にとっては練習スペースが自宅に確保できる点で都合が良い。東京と違って、車のクラクションが絶え間なく鳴り、物売りが行き交い、祭りや結婚式の日には、夜中まで大音量の音楽や花火が響くデリー市民は騒音に寛大なので、早朝深夜でもあまり気を使わずに練習できた。

但し、留学生の身分で住めるようなランクの家には、何かしらの欠陥と停電や断水などのトラブルがつきものだし、先進国のような清潔な部屋が見つかることはかなり珍しかった。家探しが上手くいかないときには、安全で安心して眠ることのできる屋根のある部屋に住むことがこんなに難しいことなのか…と惨めな思いがした。不動産仲介業者はバイクで物件案内をすることが多く、バイクの後ろにヘルメットなしで乗車せざるを得ず、バイクから転倒した際、バイクを運転していた仲介業者に逃げられたこともあった。私は5回引っ越しを経験したが、大家にも良し悪しがあった。その中には、

退去時に保証金を返金しない大家や、私に取り付けた家具を返してくれない大家がいて、砂を噛む思いをした。

デリーでの生活

不便さばかりが強調されがちなデリーの生活ではあるが、東京よりは英語が通じるし、ここ数年で携帯電話のタクシー呼出しアプリや、フード・デリバリーなどのアプリが浸透してきている点では、かなり便利になってきた。しかし、物乞いや労働者も溢れており、日々の生活を送る上で教育や貧富の差が顕著に見える瞬間が多々あるのも事実である。盗難やボッタクリ、修理や頼んだものが時間通りに到着しない、タクシー運転手が目的地によって乗車拒否をする、急いで目的地に向かう道中に「ごめん、ちょっとガソリン入れる」と軽いノリでガソリン・スタンドに立ち寄られる…といったことが、当たり前前に起こる。さらに、夏には50度近い灼熱が街を襲う。

また2016年11月には首相から高額紙幣停止が突然発表され、高額紙幣が一瞬にして紙になる事態が起こったことも記憶に新しい。新紙幣が市場に出回るまでには数か月かかった。その数か月間、ATMの中の紙幣は空になり、生活に困窮した自殺者などの報道があり、暫く混乱状態が続いた。個人的には、預金が引き出せず、家賃が払えず、大家が文字通り本気で扉を叩いて取り立てに来るという恐ろしい経験もした。強引な政策の数か月後には、新札が浸透しており、何事もなかったかのように社会はまた元の通りに動き出していた。

インドの発展は目覚ましいものの、日々予期せぬ出来事が起こり、将来を計画してもそれ通りに進まないことが多い。日本のように様々なものが滞りなく予定通りに進むことが当たり前という感覚でデリーに身を置くと、生活で直面する1つ1つのトラブルが苛立たしく思われる時があり、日本で生まれ育ったためにインドで小さなことにいちいち腹が立つなんて!…と非常に損をしている気分にもなった。

舞踊漬けの日々、そこで得たもの

舞踊学校のクラスは、毎日午後5時くらいから9時過ぎまで行われており、師匠らが地方や海外公演などでデリーの外にいない限り、毎日舞踊の世界にどっぷりと浸かることができた。最初は完全なるお客さん扱いをされていたが、現地の言葉に明るいこともあり、少しずつ雑用や身の回りの世話を任されるようになった。雑用をしながら、先輩の振付・リハーサルの現場を見学させて頂いたり、お祭りの日にご家族の集まりなどに声をかけて頂いたことは、一生の財産だ。

毎日、いつかかってくるか分からない師匠や姉弟子からの電話を待ち、鞆持ち、お茶出しから、師匠の公演前の楽屋の世話、クラスのアシスタント、映像の編集、師匠の地方公演のアテンドまで、ありとあらゆる経験をした。毎日お昼過ぎから夜まで、師匠や姉弟子たちと舞踊や音楽とそれにまつわ

るこぼれ話に溢れた世界で過ごしたお蔭で、無意識のうちに舞踊や音楽に伴うあらゆる知識や感覚が身に付き、普段の生活の中で舞踊の世界に存在する様々な目に見えない「いろは」が自然と自分の中に培われていくのを感じた。たった4年の留学中に、デリーや地方公演の機会を20回以上も与えて頂いたのは奇跡だった。

こうして文字に起こすと、ドラマティックなサクセス・ストーリーに聞こえるかもしれないが、綺麗な思い出ばかりではない。華やかな舞台裏の競争は、凄まじかった。師匠はムガル宮廷から代々続く宮廷舞踊家の家元。そのクラスに入れて頂けるだけでも身の丈に余る名誉だった。けれども、その中では公平ではない競争社会を目の当たりにした。単純にどれだけ練習を重ねたか、どれだけ真面目に取り組んでいるかだけでは評価されない。私には天賦の才能も華もなく、地味で愚直なタイプなので、大して練習もしないでクラスにやってきては、優等生ぶった口の上手いクラスメイトに掻き消されてしまうのだった。いくら現地の言葉を不自由なく話せても、大きな声と態度で自分をアピールすることができない私は勇気を出して声を上げて、狡賢い年下のクラスメイトに笑い者にされるだけだった。周りが練習不足で覚えていなかったリズムを一人だけ覚えていた時も、誰も私に関心を払わなかった。師匠や姉弟子のいない舞台裏での嫌がらせや陰湿な陰口もあった。リハーサルの直前に振付を思い出せない時や試験の前など、私の助けが必要な時にだけ、作り笑顔で話しかけられた。

外国人でインド古典舞踊をインドまで習いに來る人は、多くはないかもしれないが、少なくもない。わざわざ自分の国で慣れ親しんだ環境を捨て、リスクを背負って移住してまで舞踊の習得を試みる者の熱意は自明の事実で、そうした留学生の真っ直ぐな気持ちも、他人の利益のために利用されたこともある。上カーストの生徒で、出自や金銭に物を言わせている者もいた。純粹に舞踊を愛する自分の強い気持ちと、数少ない心優しい姉弟子がいなかったら、心が折れて留学の途中で帰国してしまっていたかもしれない。自分の強い意志と目標が苦しい時に自分自身を奮い立たせ、自分の正直な気持ちが不公平な環境に負けない強さを生んだと思う。

また、アイデンティティーについてもかなり悩んだ。生粋の日本人である私は、日本人としてインドの古典舞踊を踊る意味を考え続けた。見た目や骨格が異なる私は、伝統的な舞踊劇の演目では役に付けない。舞台を見に来てくださった人々の声を聴いて、悩んだ末に辿り着いた結論は、舞台上で伝えたいテーマを観客に伝え、人の心を動かすことができるのならば、表現に国籍は関係ないということだ。例えインド人でも舞踊や音楽の訓練を積まなければ、そして舞台上で表現して人の心を動かさなければ、カタク舞踊家とは言えない。同様に、日本人だからといって必ずしも誰もが日本舞踊の知識や教養を備え、その道で成功できるとも限らないだろう。

私は舞踊の修業のために、インドに合計5年間ほど滞在した。そこでは舞踊だけでなく、世界で普遍的に存在する人の弱さ、醜さ、強かさ、苦しみ、そしてそれを乗り越えた先にある喜びや達成感を経て、自分という人間の存在と自分の人生の目的が何なのかを改めて確認する機会を得た気がする。

人それぞれ留学先や留学の目的、タイミング、渡航先で出会う人々や得る経験は様々で、留学後の満足感や達成感、その先の人生設計も多様だが、そのオリジナルな時間と経験が、その人の視野を広げ、未来の社会と世界をより良い場所にするキッカケになることを願ってやまない。

(参考)

留学日記：デリー・カタック・ダイアリー (<https://kathak-diary.theblog.me/>)



芸術の女神サラスワティーに祈りを捧げる春の祭日



初舞台の後、師匠と



マハーラーज師匠 79 歳のお誕生日

師匠の生家にて



古城遺跡で行われた祭典のステージにて

(クレジット : Rakesh Kumar)



大好きなシャーシュワティー姐さんと